

国語(現代文・古文・漢文)

名古屋大学 文学部、教育学部、経済学部 (前期) 1/6

<総括>

出題数	現代文 1題・古文 1題・漢文 1題	試験時間	105分
<p>人間の本质である共感能力=やさしさの範囲が人間以外の生物まで拡大し、他の生物を食べなくなっていく傾向について論じた文章からの出題。昨年と比べ、文章量は大きく増加したが、文章自体は読みやすいものだった。設問は、昨年と同じく、漢字の読み書き、記述問題4題、内容合致問題が出題された。記述問題は、昨年と比べて記述量がやや減少したうえに、解答の根拠が比較的明確なので、昨年より解きやすかった。全体としての難易度は昨年より易化した。</p>			

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	『増えるものたちの進化生物学』(市橋伯一)
頻出度合 ・的中等	普通
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 昨年は3941字、今年は5303字で1362字増加
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	評論	問一	漢字の読み書き	標準	「甲殻」の書き取りはやや難だが、それ以外は特に難しいものはない。
		問二	記述	やや易	傍線部のある段落とその次の段落の内容をまとめればよい。
		問三	記述	標準	傍線部のある段落とその次の段落の内容をまとめればよい。
		問四	記述	標準	傍線部の前の2つの段落の内容をまとめればよい。
		問五	記述	やや難	幅広い範囲をふまえて解答を作成する必要がある。
		問六	客観	易	本文の内容に合致するものをすべて選ぶ。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

国語(現代文・古文・漢文)

名古屋大学 文学部、教育学部、経済学部 (前期) 2/6

<学習対策>

問題集や過去問を利用して、評論に触れて読解力を養うとともに、記述問題の練習を十分に積んでおくこと。
漢字の読み書きについても対策を怠らないようにしておくこと。

国語(現代文・古文・漢文)

名古屋大学 文学部、教育学部、経済学部 (前期) 3/6

<総括>

出題数	現代文 1題・古文 1題・漢文 1題	試験時間	105分
-----	--------------------	------	------

鎌倉時代前期の日記『信生法師日記』からの出題であった。日記は頻出であるが、男性による日記の出題は稀である。文章量は、昨年と比べてかなり減少し、本文の内容も読み取りやすいように思われるが、現代語訳の問題は、何を、どのように補うべきか、判断に悩んだ受験生も多かったと思われる。設問は、言葉の補いが必要な現代語訳が5箇所、そのうち2箇所は和歌であった。例年出題されている説明問題は出題されず、昨年説明問題として出された和歌も、今年は現代語訳として出題された。また、文学史は、2018年度以来の出題であった。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	『信生法師日記』(信生)
頻出度合 ・的中等	稀
分量 前年比較	分量 減少 ・やや減少・変化なし・やや増加・増加 昨年は1526字、今年は693字で833字減少。
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	日記	問一	記述	標準	現代語訳の問題が3問。3問とも重要単語、文法(助動詞など)の正確な訳のほか、人物や内容の補い、指示内容の具体化などに気を付ける。
		問二	記述	標準	和歌の現代語訳の問題が2問。(A)は直前の和歌の内容、【注】の和歌を踏まえて考える。(B)は「小忌衣」の「小忌」に直前部の「麻績」が掛けられている。
		問三	記述	標準	文学史の問題。鎌倉時代の旅日記、紀行文で、阿仏尼と後深草院二条の作品を答える。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

重要古語・文法の知識を基礎とした現代語訳の力をつけることが、大切である。その際、逐語訳だけでなく、主体の補いなどに注意を払い、わかりやすい現代語訳になるよう意識することが必要である。また、和歌に関する問題は頻出である。現代語訳、心情や具体的内容を把握する練習に加えて、和歌修辞や比喻表現の理解も深めておきたい。今年はお題されなかったが、次年度以降、出題の可能性の高い記述量の多い要約・説明問題については、実際に書いてまとめる練習を積んでおくこと。文法や文学史も出題されることがあるので、対策を怠らないこと。過去の問題を解いて名古屋大学の出題形式に慣れておくとよい。

国語(現代文・古文・漢文)

名古屋大学 文学部、教育学部、経済学部 (前期) 5/6

<総括>

出題数	現代文 1題・古文 1題・漢文 1題	試験時間	105分
-----	--------------------	------	------

本文は、蟹が湿地から川や海をめざす生態を述べて、今の学者への意見を論じる文章である。本文の文字数は265字で、昨年とはほぼ同じである。設問数は昨年同様6問だが、昨年あった枝問を設ける問題はなくなり、全体として記述量は減った。例年通り、語の読み・現代語訳・書き下し文・内容説明・150字の説明問題が問われたが、昨年は4問だった現代語訳の問題は1問に減少し、昨年は2問だった説明問題は3問であった。問六の150字の理由説明の問題は、「人の智」を「蟹の生態」と対比して要領よくまとめるのが難しい。

<本文分析>

大問番号	三
出典 (作者)	『唐甫里先生文集』巻十九「蟹志」(唐・陸龜蒙)
頻出度合 ・的中等	稀
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 昨年は266字、今年は265字で1字減少
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	論説	問一	記述	標準	語の読みの問題。「或(あるいは)」「苟(いやしくも)」は基本的な語。「夫(や)」は反語の用法。
		問二	記述	標準	内容説明の問題。「断」は「(蟹の通り道を)断ち切る」こと。漁師がザルを仕掛けて蟹を捕獲するのを「蟹断」と言っていることを読み取る。
		問三	記述	やや易	解釈の問題。注を踏まえて正しく逐語訳する。「十六七」は「六割から七割」の意味。
		問四	記述	やや易	書き下し文の問題。置き字「於」を用いた比較の用法がポイント。「浸」は注を踏まえて「やうやく」と読む。
		問五	記述	標準	内容説明の問題。蟹が「海」へと向かう様子を、「長江」へ向かう時と同様であると言っている点を読み取る。
		問六	記述	やや難	理由説明(150字以内)。湿地から長江へ、さらに大海へと向かって成長する蟹と比較して、六経を学ぼうとしない今の学者の姿勢を批判的に述べていることに着目してまとめる。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

国語(現代文・古文・漢文)

名古屋大学 文学部、教育学部、経済学部 (前期) 6/6

<学習対策>

重要語や句形を問う問題は必ず出題されるので、これらの基礎知識に習熟すること。300字程度の長文が出ることも多いので、日頃から長文を数多く読むように心掛けたい。現代語訳、書き下し文、内容・理由説明の問題は、二次対策用の問題集や過去問などで訓練しておくのがよい。150字の説明問題の対策として、漢文を読んで要約する練習を心掛けるとよいだろう。